●キタオットセイ

キタオットセイは北太平洋に広く分布し、6～10月ごろにベーリング海やオホーツク海の孤島で繁殖します。陸上での生活は、この4ヶ月間の繁殖期間だけで、その後は海の生活に移ります。水中と陸上との両方で生活するアシカやアザラシの仲間の中では最も水中生活に適応していて、前あしと後あしを重ねた独特の姿勢で海面に浮かびながら眠ることもよく知られています。また毛皮が大変によく発達していて、体温がうばわれてしまうのを防いでいます。この良質な毛皮をとるために18世紀から大量に捕獲され、生息数が急激に減ってしまいましたが、その後各国間での国際条約や国内の規制によって保護された結果、現在では生息数は増加しています。当館では今までに2頭のキタオットセイを保護しました。この2頭は、海上生活をしている時期に弱って海岸に上がってしまったものです。いづれも栄養補給を行ったところ、見ちがえるように元気になり、一頭は無事に海に戻すことができました。しかし他の一頭は体長68cm、体重5kgの子どもで、保護した時すでに両目とも失明していて、放流しても海では生活していけないと判断されたため、水産庁と連絡を取り、当館で飼育することになりました。このオットセイは「トット」と名付けられ、保護されて11年目を迎える現在では、体長125cm、体重30kgに成長し、視力はなくても住み慣れた飼育プールで元気に生活しています。　（中野）

▲キタオットセイ　*Callorhinus ursinus*

●マツカサウオ

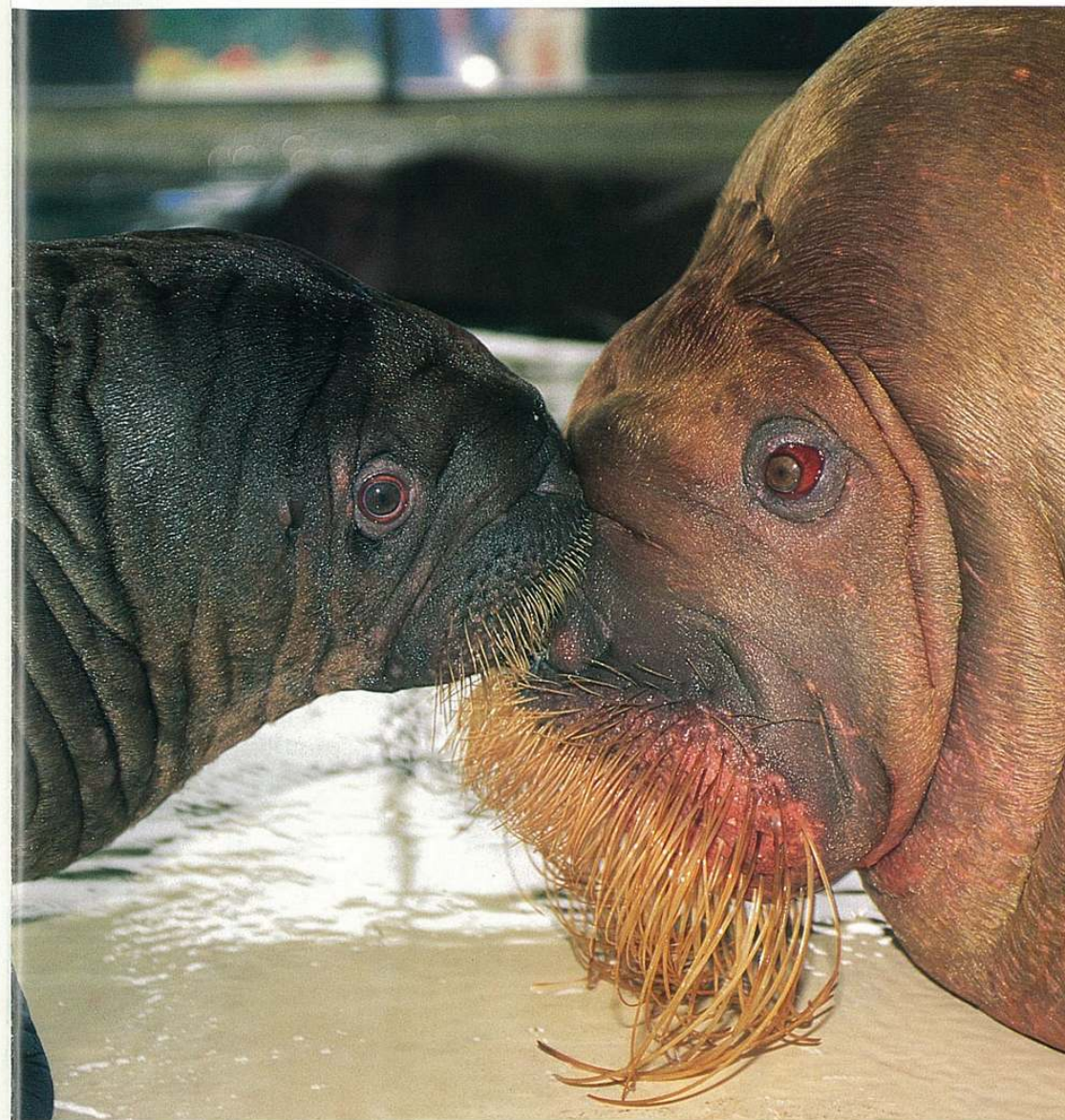
マツカサウオは南日本の沿岸のやや深い海底に棲み、甲殻類を主食としている体長8cm程の魚です。体色は黄色の地に黒いふちどりのうろこがあり、一見「松ぼっくり」のように見えます。これが名前の由来です。

水槽では主に尾びれを動かしてゆっくりと泳いでいますが、エサのエビを食べる時にはそっと近づき一瞬のうちに吸い込む早技の持ち主で、時には自分の口からはみ出すほどの大きなエビをくわえて泳ぎ回ることがあります。

マツカサウオの下あごの両側には、発光バクテリアが共生している卵円形をした発光器があり、光でエサとなる生物を誘い寄せたり、仲間とのコミュニケーションに役立てていると言われています。

当館では、このマツカサウオの発光の様子をご覧いただいていますが、日本沿岸にすむマツカサウオは発光が弱く観察しづらいため、発光の強いオーストラリア産のマツカサウオ（さかまた43号にて紹介）を使っています。

暗闇の中でマツカサウオが青緑色の光を放ちながらゆっくりと泳いでいる様子はとても幻想的です。　（森）

▲マツカサウオ　*Monocentris japonica*

さかまた No.44　（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　平成6年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 44

セイウチの「タック」と「ムック」

♥赤ちゃん誕生までの道のり

▲「チャッキー」と母親「ムック」、父親「タック」

日本でのセイウチの飼育の歴史は、アメリカやヨーロッパと比べるとまだ浅く1977年に伊豆三津シーパラダイスが、幼獣3頭（オス・2才）をデンマークのコペンハーゲン動物園より搬入したのが最初です。

２頭の搬入

当館では1983年12月８日に、日本では２番目の例としてモスクワ動物園より、オス・メス各１頭のセイウチの幼獣を搬入し、飼育を開始しました。この２頭は後に一般公募により、オスは「タック」、メスは「ムック」という大変親しみやすい名前が付けられました。（さかまたNo.23参照）この２頭のセイウチは、幼獣のためかとても人に馴れやすく甘えん坊でしたが、ささいなことでも驚いてしまうという大変憶病な一面もありました。しかし、一度馴れてしまうと、いろいろなものに興味を持ちはじめすぐにイタズラを始めました。「タック」と「ムック」とのつきあい方がわかるようになるまで、係員は喜びととまどいをくり返す毎日で、まるでイタズラ小僧の後を追いかけ走り回る新米ママのようでした。

新居へのひっこし

1984年３月に冷却装置のついた屋内飼育施設が完成し、一般公開されました。仮の飼育施設から広いプールに移された２頭は、生き生きと無邪気にはしゃぎ回り、ホッとしたのもつかのま、イタズラはどんどんエスカレートしていきました。周囲に落ちているものは必ずと言っていいほど、飲みこんでしまうので特に注意をはらっていましたが、今度は新居の壁のペンキや観察用のガラス窓のふちについている防水用のシリコンゴムなど、はがせるものは手あたり次第にはがして飲みこんでしまいます。特に「ムック」はまだわずかしかのびていない牙（犬歯）でシリコンゴムにキズをつけてから唇を使って大変器用にはがしては飲みこみます。はがれかけている部分の補修をくり返す毎日が続きましたが、そうこうしているうちに、ムックが突然エサを食べなくなり、元気を失い、じっとしていることが多くなりました。搬入後４ヵ月のことでした。その後１ヵ月あまりもエサを食べない日が続いたので、連日、胃にチューブを入れて特製ミルクを流し込み栄養補給を行いました。この処置と飼育担当者の愛情と努力により、

▲「ムック」少し元気を回復してきた頃'84年5月

次第にエサを食べはじめ、元気を回復していきました。ペンキなどの異物を飲みこみ、消化管の通過障害を起していたのです。このことは、セイウチの幼獣の飼育環境に対して大いなる反省をもたらすできごとでした。

２頭の成長

その後は２頭共順調に飼育され、アシカショーに特別出演したり、一般のお客様にさわっていただく「ムックにタッチ」のコーナーでそのユーモラスなしぐさを披露したりと、すっかり当館の人気者となりました。特にタックは飼育舎のガラスごしにお客様と遊ぶのが大好きで、お客様がガラス面に近づくと、そのとび出た眼でギョロリとにらみ、口と自慢のヒゲをガラスにこすりつけたり、セイウチ特有のチャイムのような音色を出したり、胸部を前肢でたたいたりと、自らすすんでいろいろなパフォーマンスを行うのでチビッコ達は大喜びです。

▲アシカショーに特別出演 お兄さんと握手（左ムック、右タック）

▲ガラスごしにお客さまと遊ぶ「タック」

ムックのイタズラはその後も続きましたが、飼育施設の塗装方法を変更したため、同じような病気はくり返すことがありませんでした。しかし牙を壁やプール底にこすりつける遊びをよくしたために牙の先端がどんどんすり減っていました。牙のすり減りかたはその後もひどくなる一方で、そのうちに顔面が腫れたり、食欲不振や元気がなくなるなどの症状が除々に出はじめました。そこで、やむをえず、1987年12月に牙を摘出する手術をすることに踏みきりました。全身麻酔を行い、水族館長の執刀により、約１時間におよぶ日本で初めてのセイウチの抜歯手術は無事に終了しました。そのおかげで、その後のムックの体調は完全に復調したのです。

ムックの出産

搬入時は２頭共体重が100kgに満たなかったのですが、10年目には、タックの体重は１トンを越えました。また当時まだ生えていなかったタックの牙も、33cmとオスの成獣の風格となりました。あのあどけなかったタックもムックもすっかり大人になったのです。

1993年３月、普段は夜、陸にあがり体をよせあうようにして眠る以外は、ほとんどお互いに無関心な２頭でしたが、この日に限り様子が異りました。ムックは食欲が弱く、おちつきがなく、しきりにタックにすり寄っていきます。タックはそれを嫌がらず、ついに水中で交尾が行われました。この交尾より15ヵ月目の1994年６月６日の早朝、ムックは男の子を無事に出産しました。係員をずいぶんてこずらせたあのイタズラ「ムック」が母親になったのです。子供は、出生時、体長105cm、推定体重60kgで、ムックは大変良く子供の面倒を見ています。２ヵ月後には、タック・ムックの搬入時を上回り、体長140cm、体重110kgと順調に成育し、一般公募により「チャッキー」と名付けられました。「チャッキー」を見ていると、11年間タックとムックと共にすごしたいろいろな思い出が頭をよぎり、タックとムックに「ありがとう」という気持ちでいっぱいになります。

（荒井）

▲「タック」搬入６ヵ月頃

▲現在の姿

トピックス

「ラッコの海」

●いたずらクーピーは大喜び●

▲砂の中の貝をさがす「チャーミン」

ラッコは非常に好奇心が旺盛でいたずら好きな動物であるため、これまでは本来ラッコが生活している海にある石や海藻または魚をはじめとする他の生き物を一緒に展示することは難しいとされてきました。魚を捕えて遊んでしまったり、腹の上の貝を小石で割るのと同じ要領で、石を飼育プールのガラスにたたきつけ、ガラスを割ってしまう危険があったからです。しかし当館ではラッコをより自然な環境で飼育し自然な姿をご覧いただくために、今年4月からラッコプールに石や砂、海藻そしてサケやイワシといった魚を同居させてみました。石はラッコがかかえられない位の大きなものを選びました。また海藻は、ホンダワラ、ジョロモクなど海で採集したものを取り付けました。

▲水底の岩と砂に興味を示す「クーピー」

係員の心配と苦労をよそに、ラッコ達は大喜びで、特に今年1月に当館で生まれた「クーピー」は、海藻を体に巻きつけたり、バシャバシャと水面にたたきつけるようにして遊んだり、前あしで砂を掘りかえして貝を捜したりと、これまでにない多くの行動を見せてくれるようになりました。また当初心配された同居している魚への影響もほとんどなく、群で泳ぐサケのあいだを潜水していくラッコの姿も見られるようになりました。

みなさんも「ラッコの海」で遊ぶラッコの姿を是非ご覧下さい。きっとラッコという動物の本当の姿が見えてくるものと思います。

（中坪）

▲海藻であそぶ「チャーミン」

特別展示

「イクラは誰の子？」開催中！

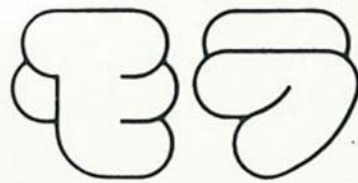
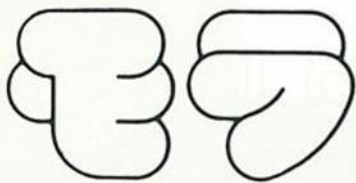
▲展示風景

パノリウムでは「水の一生」をテーマに展示を行っており、水槽の中の生物からは、その生活の一部をかい間見ることができます。しかしその中でも産卵や出生は、ごく限られた時期や時間の中で行われるので、めったに見ることができません。そこで今回の特別展では、水の中の小さな卵にスポットをあててみました。

ひとくちに水の中の卵といっても形や性質は様々です。そこで親とその卵を押しボタン形式で紹介したり、トラザメの卵の中でおこっている発生の過程を生きた卵に光をあてることにより、ご覧いただいたりしています。次のコーナーでは、海での繁殖のためのポイントを紹介する他、当館で行っているタイリクバラタナゴの人工採卵の様子をビデオで紹介するとともに、卵から稚魚への変化を備えつけの虫メガネで観察できるようになっています。「がんばれ卵」と題した2択式のクイズでは、それと関係する問題がずらりと10問並んでいます。全問正解ならかなりのものです。最終コーナーは「卵の熟語」で知恵比べです。表示されていない熟語を教えてくれた方にはオリジナルテレカをプレゼントしています。すべての展示をご覧になったならばアンケート調査にご協力いただきます。一番興味をもたれた展示のスイッチを押すとデジタルの表示が加算される仕組みになっていて、この結果を今後の展示の参考にさせていただこうと考えています。

（桐畑）

▲何問正答できるでしょう

▲トラザメの卵の中を観察中

モモイロペリカンが仲間入り

当館では、南極周辺に生息する水鳥・ペンギンを飼育展示していますが、この夏新たに赤道付近に生息するモモイロペリカン６羽を導入しました。これは、生息場所の違いや、からだのつくり、水とのかかわりなどをペンギンと比較することで、生物の形態の違いの理解に役立ててもらうことを目的としたものです。また、展示プールでの展示ばかりでなく、歩く姿や、しぐさを間近に見ていただくために集団で行動する習性を利用して１日２回の園内散歩を行っています。ユーモラスな姿で歩くペリカンの後について一緒に散歩するチビッコや海をバックにペリカンと記念撮影をするカップルなど、園内での憩いのひとときにも一役かっており、ちょっとした人気者となっています。

（村松）

夜の水族館探検

夏休みの期間中、家族連れのお客様の宿泊でいっぱいになる鴨川シーワールドホテルでは、他のホテルや旅館では体験できない特別催物として毎年「夜の水族館探検」を行っています。昼間のシーワールドでは味わえない魚やウミガメ、ペンギン、イルカ、シャチ等の夜の生活風景や行動を興味深く観察することができます。

また、この催し物では、眼の前に広がる海と砂浜というすばらしいロケーションの中で、波頭がくずれる時にあやしく青白く輝く夜光虫に感動したり、遠く沖にきらめく漁火や満天の星空をながめるなど夏の夜の家族での共通体験を味わうことができ、家族内でのコミュニケーションにも役立っています。

（清水）

新しく生まれかわった ディスカバリーガイダンス

当館では、ご来園のお客様がショーや魚の展示を観覧するだけでなく、動物達と身近に接したり、普段見ることができない水族館の裏側を見学することにより、「海の動物達との出会い」をなお一層深めていただくことを目的として、５つのメニューからなるプログラム「ディスカバリーガイダンス」を設けています。このプログラムは約10年前から行われていましたが、今年の４月からは装いも新たに再スタートをしました。その内容は、シャチとのキスや記念写真を新メニューとして加え、さらに参加方法もこれまでの先着順や選抜方式から入園後の有料事前申し込みに変更し、公平化を図ることにしました。

ご来園の折には、ぜひシーワールドのもう一つの楽しみを体験されることをおすすめします。

（黒川）

感動夏体験―海の生きものとふれあい―

今年の夏、初めての試みとして小学校5～6年生と中学生を対象に体験的な催し物、「ジュニアトレーナー」と「ジュニア飼育係」が行われました。ジュニアトレーナーは、海の動物の１日トレーナー入門といえるもので、動物達との直接的なふれあいを通し、より良く動物を知ってもらえるようにアシカと握手をしたり、イルカの背ビレにつかまって泳いだりしてもらいました。また、ジュニア飼育係では、魚を飼育する基本的な知識を得てもらおうと、磯のタイドプールで生物を観察し、採集した魚を自分達で組み立てた水槽で実際に飼うという試みも行われました。この他にもトレーナーとの夕食会や夜の水族館探検なども盛り込まれ、参加した58名の子供達には新鮮な感動に包まれた忘れられない夏休みとなったようです。

（前田）